

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 15 日現在

機関番号：84602

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2011～2012

課題番号：23720395

研究課題名（和文） 煉瓦生産を通して見た日本近代化過程の考古学的研究

研究課題名（英文） The Archaeological research of Japanese social modernization from an analysis of the brick industry

研究代表者

北山 峰生 (KITAYAMA MINEO)

奈良県立橿原考古学研究所 調査課 主任研究員

研究者番号：20332463

研究成果の概要（和文）：煉瓦の製作技術を反映する痕跡が、製品の外面にどのように現れるかを確認した。その視点にもとづき、明治時代から大正時代にかけての、煉瓦生産の技術的推移を検討した。その結果、一般に言われているような生産工程の機械化は、関西地方では一般的ではないことが明らかとなった。このことから、従来の研究で構築された大手企業の記録に基づく枠組みでは、産業の実態を捉えられていないことを指摘できる。

研究成果の概要（英文）：I verified how the traces that reflect the manufacturing technique of the bricks appear on the surface of the products. Based on that perspective, I investigated the technical transition of the brick production from the Meiji to the Taisyo era. As a result, it became clear that such the mechanization of the production process as commonly referred to was not necessarily common in the Kansai region. From this study, I suggest that the framework based on the record of the leading companies, which has been built through previous studies, does not capture the actual image of the industry.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	700,000	210,000	910,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：日本考古学・近代化・煉瓦

1. 研究開始当初の背景

「近代化遺産」を評価する動きが、いま広がっている。しかし、近代化を論じる場合、いかにして近代化を達成したかを追求することが多く、近代化の過程でうしなったものについての考察は少ない。

そのような中、考古学の立場から、産業近代化が在来社会にあたえた影響を、功罪両面から明らかにしようとする試みが、始まっている。具体的には、煉瓦生産開始をめぐる、窯業生産体制に注目することで、近世窯業と近代窯業の連続性と断続性、さらには窯業生産と社会の関わりについて論究されている。

本研究は、すでに先鞭のつけられた煉瓦という素材を扱い、さらなる展開をめざすものである。

2. 研究の目的

この研究は、煉瓦生産の考古学的な分析を通して、日本の近代化過程の諸問題を考えるための視点をを得ることを目的とする。

具体的に言うと、つぎの通りである。煉瓦に残された、製作技術・刻印といった生産者の姿を反映する痕跡を、考古学的に読み取ることが試みる。この試みは、産業構造の屋台骨ともいえる生産の実態と、流通のあり方を、

煉瓦という一側面から追求しようとするものである。

このような研究視点を蓄積することで、即物的に近代化の過程を復元し、それが包括する諸問題を指摘することが可能となるであろう。

3. 研究の方法

(1) 発掘調査資料の観察を通して、煉瓦の製作過程で施されるさまざまな加工が、製品の外面へいかに現れるかを検討する。

(2) 現存する煉瓦建築物の観察を通して、つぎの点を検討する。

①各建築物に使用される煉瓦の規格が年代別にいかに変化するか。

②ある特定の製造事業者が用いる刻印が認められた場合には、その分布範囲はどれほどであるか。

4. 研究成果

発掘資料を観察した結果、手抜成形の痕跡が、煉瓦の長手に特徴的な皺となって現れることを確認した。その視点をもとに、奈良県内に現存する煉瓦構築物を観察したところ、奈良県内では時期を問わずに、一貫して手抜成形煉瓦が供給されていることが明らかとなった。このほか、時期が下るにしたがって徐々に煉瓦の厚みが増すこと、さらに、刻印種が単純で、一つの煉瓦構築物において複数種の刻印が混在することは希であることも明らかとなった。

これら三つの視点を、阪神間における同様の検討成果と比較して、以下の諸点に注目した。

(1) 関西地方の煉瓦生産は、一貫して手抜成形が主体的であり、機械成形は客体的である。

(2) 阪神間では同時期に各種の規格が併存し、時系列的な変化傾向を示さない。これに対して、奈良県では時期が下るに従って、煉瓦の厚みが漸増する傾向がある。

(3) 岸和田煉瓦や推定堺煉瓦といった、関西一円に広く流通する刻印がある一方で、他所にはみられない地域的な刻印もある。いずれにせよ、一施設で複数の刻印が混在するようなあり方は、今のところ多くない。

以上の諸点を踏まえて、さしあたりのつぎのように解釈した。

上記(1)は、明治20年代以降、煉瓦生産における機械化が進行したという一般的な説明に対して、疑問を投げかける。そのような説明がなりたつのは、関東地方に限定すべきであって、関西地方はそれとは別の枠組みが必要である。このことは、国策として煉瓦生産が興隆した関東地方と、民間資本を主として開始された関西地方との、宿命的な差が

反映している可能性がある。

上記(2)および(3)は、阪神間の都市に比べて、奈良県はマーケットが小さいことの現れであろう。都市全体が煉瓦を受容する阪神間にくらべて、奈良県では一つの建物、鉄道の一区間、といった小規模な需要が反復されたものと想定すれば、上記(2)(3)を整合的に理解できる。すなわち、単発の需要を満たすような供給が繰り返された故に、その時期において最も主体的な規格の煉瓦が供給されるし、また広域流通とは別に、地産地消的な流通のあり方も併存すると考えるのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

北山峰生、煉瓦についての概説、ヒストリア、査読有、231号、2012、2-10

北山峰生、奈良県における明治・大正期煉瓦の基礎的考察、ヒストリア、査読有、231号、2012、55-69

〔学会発表〕(計2件)

北山峰生、発掘された煉瓦資料の集成と現状分析、大阪歴史学会考古部会、2011年10月28日、阿倍野市民学習センター

北山峰生、奈良県における煉瓦構築物の変遷、公開シンポジウム「煉瓦生産と近代考古学」、2011年11月20日、阿倍野市民学習センター

〔その他〕

ホームページ等

<https://www.dropbox.com/sh/07qfiweyui54k85/1PJqfN41jL?n=76559438>

<https://plus.google.com/b/105028540390512424482/105028540390512424482/posts#105028540390512424482/posts>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

北山 峰生 (KITAYAMA MINEO)

奈良県立橿原考古学研究所 調査課 主任研究員

研究者番号：20332463

(2) 研究協力者

藤原 学 (FUJIWARA MANABU)

吹田市立文化創造館

竹村 忠洋 (TAKEMURA TADAHIRO)

芦屋市教育委員会

山岡 邦章 (YAMAOKA KUNIAKI)
岸和田市教育委員会